

# 全科協ニュース

1973年9月1日発行  
(通巻第13号)

全国科学博物館協議会

東京都台東区上野公園  
国立科学博物館内  
〒110  
TEL.822-0111 (大代)

おもな内容：◇昭和48年度全国科学博物館協議会理事会、総会を開催 ◇宇宙部門を大巾改造 科学技術館 ◇全科協北から南から 東京都高尾自然科学博物館 新井二郎 ◇博物館職員講習を受講して ◇会員館園の紹介 山形県立博物館・木の葉化石園

## 昭和48年度全国科学博物館協議会理事会、総会を開催

昭和48年度全国科学博物館協議会の理事会および総会が7月17日に国立科学博物館大会議室で開催された。

理事長から、協議会も設置して2か年を経過し、学芸員講習、博物館事業研究会などのいくつかの事業を実施してきたが、まだまだ実施すべきことがたくさんあり、会員館園のご協力方おねがいしたい旨のあいさつがありました。また、新規加入の7館のうち、出席の鳥取県立博物館および神宮徴古館農業館の紹介があった。

ひきつづき、会議定数について、出席20館、委任状提出35館あり、会議の成立を確認し、議事に入った。

### 議事の概要

#### 1. 役員の改選について

理事および監事の改選についてははかったところ、再任の意見が出され、賛成多数により全員再選された。

ひきつづき、理事長および常任理事の選任についてははかったところ、再任の意見が出され、賛成多数により全員再選された。

なお、理事館および常任理事館を追加することについては、現状どおりとする意見があり、従来どおりとされた。

#### 2. 昭和47年度事業報告について

事務局より昭和47年度に実施した次の諸事業について説明が行なわれ、審議の結果承認された。

##### (事業)

##### (1) 理事会および総会の開催

- 理事会 昭和47年7月6日

##### 議 題

- ア. 昭和46年度事業報告および収支決算について
- イ. 昭和47年度事業計画案および収支予算案について

ウ. その他

- 総会 昭和47年7月26日
- ##### 議 題

- ア. 昭和46年度事業報告および収支決算について
- イ. 昭和47年度事業計画案および収支予算案について

ウ. 理事選任の件について

エ. その他

#### (2) 調査研究および情報の交換

- 全科協博物館事業研究会における研究発表に対する討論等をとおして実施

#### (3) 資料、文献の交換および貸借の幹施

- 展示資料の貸出し等を実施

#### (4) 研究会、講演会等の開催

- 第2回全科協博物館事業研究会の実施
- 昭和47年度博物館職員講習の実施協力

#### (5) 自然史および理工系博物館に関する普及広報

- 全科協ニュースの隔月発行

#### (6) 機関誌の編集

#### (7) 全科協加入館の拡大

- 全科協趣旨の徹底

#### 3. 昭和47年度収支決算について

事務局より説明があり、監事(東京都高尾自然科学博物館)の予算執行が適正である旨の監査報告があり、審議の結果承認された。

#### 4. 昭和48年度事業計画案について

事務局より昭和48年度に実施予定の下記の諸事業について説明があり、審議が行なわれ、理事長から、博物館職員講習への参加者が2年つづいて30名たらずで

終わったことについて、今後各館園の協力により参加者が増加するようにしたいと要請があった。また期間、時期についての要望に対して理事長から時期については考慮の余地がある旨回答があった。

研究事業について、加入館園が西に多いことから研究会の会場を関西以西にしてはどうかとの提案があり、理事長から48年度からただちに行なうことは予算の関係上困難だが、各部会長とも相談し、検討してゆく旨回答があり、原案どおり承認された。

#### (事業計画)

- (1) 理事会および総会の開催
- (2) 調査研究および情報の交換
- (3) 資料、文献等の交換および貸借の斡旋
  - 博物館資料(文献資料を含む)の交換、譲渡、貸借等の斡旋ならびに情報提供等
- (4) 研究会、講演会等の開催
  - 博物館専門職員のための展示資料の製作、展示、修理保管等に関する技術の研修会
  - 自然科学系および理工系博物館の学芸員の資格取得講習の実施協力
  - 会員館園相互での共催事業の実施
- (5) 自然史および理工系博物館に関する普及広報

◦ 全科協ニュースを隔月(年6回)発行し、全科協加入館園の紹介ならびに特別展示、教育、研究活動などの実状を関係方面に普及する。

- (6) 機関誌の発行および研究成果の発表
  - 科学博物館の資料収集、展示、資料の整理保管および教育活動等に関する調査研究の成果を発表するための機関誌を発行する。
- (7) 全科協加入館の拡大
  - 新規加入のためのPR等の実施
- (8) その他博物館事業振興に必要な事業
  - 会員名簿、案内書等出版物の発行
  - 科学博物館関係国際機関からの情報を収集し、紹介する。

#### 5. 昭和48年度収支予算案について

事務局より説明があり、審議の結果、会費未納館の後年度徴収の取り扱いについて発言があり、これは、会費収入として経理してゆくこととし、原案どおり承認された。

なお、会費に関し、知事会等の規制措置があり支出しにくいとの発言があり、これについて種々意見の交換が行なわれた。

#### 全国科学博物館協議会役員名簿

理事長	国立科学博物館	福田 繁
理事	大阪市立自然史博物館	千地 万造
	神奈川県立青少年センター	足立原 茂徳
	科学技術館	田代 茂樹
	交通博物館	古谷 善亮
	五島プラネタリウム	五島 昇

	通信総合博物館	関野 与八
	豊橋向山天文台	金子 功
	名古屋市立名古屋科学館	佐藤 知雄
	NHK放送博物館	若菜 三雄
	山口県立山口博物館	臼 杵 華臣
監事	熱川バナナ・ワニ園	木村 亘
	高尾自然科学博物館	土屋 道生

## 宇宙部門を大巾改装

— 科学技術館 —

宇宙や宇宙開発に関する展示は、多くの理工系博物館でとりあげているが、いずれも人気を集める展示のひとつとなっている。

当館においても開館当初から約500㎡のスペースを割当て、人工衛星、ロケットなどの展示を行ない人気を集めてきた。

しかし、米、ソ中心の宇宙開発が一段落した現在、我が国も着実な進展がみられ、東京大学の4つの衛星打ち上げをはじめ、実用衛星打ち上げの段階に入っていることは見のがすわけにはゆかない。

今回の展示改装は、こうした日本の宇宙開発に焦点を

合わせるとともに、天文学分野における科学技術の貢献等もあわせてとりあげ、宇宙科学の急速な進展を紹介しようとして計画されたものである。

#### 新しい展示の構成

展示は2つの部屋に分かれている。第一の部屋は“宇宙への招待”，第二の部屋は“宇宙への進出”という部屋タイトルである。

#### 1. 宇宙への招待

- (1) クエスチョン12

「宇宙には生物がいるだろうか」を始め、興味深い宇宙の質問12を集め、マルチメディアという新方

式によって回答するものである。

(2) 太陽系の広がり (パネル)

太陽の構造, 各惑星の姿, 太陽系の誕生と死などにより構成されている。各惑星の姿においては, アマチュア天文写真家の協力を得てその作品により構成した。

(3) 銀河系 (パネル)

天の川の姿, 銀河系の概念, 構造等を写真, イラスト画で紹介する。

(4) 遠い宇宙群 (パネル)

数十億光年までの主な星雲を, 距離の推定の仕方とともに紹介する。

(5) 宇宙への進出 (パネル)

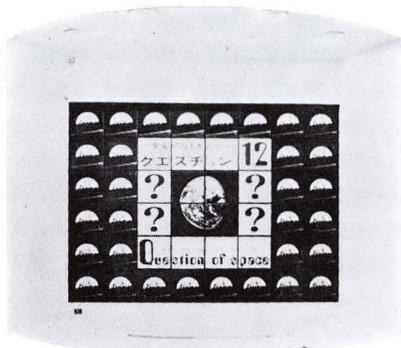
宇宙をさぐるいろいろな道具についてその役割りを教える。

(6) 人間衛星の歴史 (パネル)

ウォストーク1号からアポロ17号までの40の人間衛星を, 100枚のエピソード写真により紹介する。

(7) スペースボックス

スライド, 8mm映画を使って宇宙と宇宙開発のトピックなどを紹介するコーナーである。プログラムは, 美しい地球の姿(スライド), アポロ16号の記録(8mm映画)と決っている。



宇宙質問コーナー "クエスチョン 12"

## 2. 宇宙への進出

(1) Nロケットの構造 (1/4模型)

日本が昭和50年度に打ち上げを予定しているNロケットの構造模型である。従来の2段式ロケット発射台をつかい, その動きを説明する。

(2) ロケットを解剖する (実物, 模型)

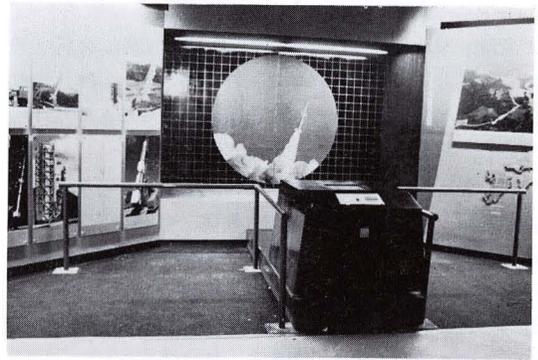
ロケットに使われる材料や装置類を模型, 実物などによって紹介する。

(3) 日本のロケット (映画, パネル)

日本の代表的なロケットの打ち上げ風景を映画によって歴史を追って紹介するとともに, 写真パネル等で解説する。

(4) 未来のロケット (模型)

イオンロケット, 原子力ロケットなどについての推進原理などを模型によって紹介する。



日本のロケット打ち上げ実況映画  
—その瞬間をとらえる—

(5) 宇宙旅行 (映画)

直径2.6mの球形カプセル内で, 火星までの旅行映画を楽しむものである。周囲のパネルでは, スカイラブ計画, 宇宙の夜食などについて, 実物, 写真等により紹介する。

(6) 気象衛星からの便り (実演)

気象庁が送信している気象図を実際に受信し描画する。1日数回実演する。

(7) 人工衛星

いろいろな実用衛星, 日本の人工衛星などについて模型, 写真, イラスト等で紹介する。

### オープンを前にして

この展示改装には, 約4,000万円を投入したが, 一番問題なのは, やはりあらゆる原材料の価格の値上りである。一時は見積りの有効期間が一週間以内などという事態もあり, 当初の計画を大巾に変更せざるを得ないこととなった。また, 当館のように, 展示教育を主目的としている場合, 普段の資料収集が充分でないため, 全科協会員館の協力を得なければ完成にこぎつけられなかったであろう。とくに国立科学博物館, 五島プラネタリウム, 明石天文科学館には, 並々ならぬ協力を賜った。誌上を借りて深謝する次第である。また, 従来展示してあったものの再活用については, ニュースにも掲載していただいたが, 向山天文台, 室蘭青少年科学館, 川崎市青少年科学館等において活用されることとなったことをご報告する次第である。

9月早々からオープンする予定であるが, 会員館園の諸氏にご視察いただき, きたんのないご批判を仰ぐ次第である。

## 全科協北から南から

### 自然教室を行なっていて

東京都高尾自然科学博物館学芸員 新井 二郎

前号、林さんの書かれた“子供達に豊富な体験学習を”を読んで、私の勤務する館で行なっている野外観察の催しに参加する子供たちにも同じようなことが見られるので、興味深く読ませていただいた。

東京都高尾自然科学博物館では、小学生を対象とした自然教室、大人向けの成人自然教室、それに中学生以上の人たちを対象とする自然観察会をそれぞれ四季一回ずつ行なっているが、前二つは自然に親しむことが中心となり、後のものはテーマを設けて、ある程度専門的な観察・研究を行なうような形をとっている。

子供たちが参加するのは、最初にあげた自然教室であり、一回の定員は70~80名、これを10班位に細分し、自然の中を行動する。この教室には、自然を愛する大学生約30人が協力してくれていて、子供2~3人に対し指導する者1人の割となる。参加する小学生の大部分は都会育ちであり、観光地のにぎやかな所には出かけるが、郊外のわりと身近な雑木林などを歩いたことはない者がほとんどである。この子供たちは、林さんがいわれたような豆博士、図鑑などで個々の動植物については詳しく知っている者が多い。しかし、高尾山周辺の丘陵に連れていってみると、広い舗装道路を歩きなれた彼等には、細い山道や雑木林の中では、どうしてよいのか戸惑った様子を示す。こうなると、自然観察以前の問題で、いかに子供たちを自然（この場合、我々が身近に感じていた雑木林の残る丘陵であるが）というものに親しませるかである。そこで、子供たちは木登りやヤブこぎ、急な斜面の登り降りなども体験することになる。木に登るのに手足

をどう動かしてよいかわからない者、道らしくないところに踏み込むのを恐る者、沢の水が透きとおっているのに驚く者、こんなにたくさん花や木があるのかと驚く者……。こんな子供たちの行動の中に、我々が考えてもみなかったことが出てくる。しかし、この中に親たちが入ってくると、子供たちは急に泥だらけの子から、いたずらもしない豆博士にかえってしまう。そこで、自然教室では、コースは同じでも、子供を親と切り離してしまうことにし、子供は自由に自然に親しませ、父兄班には自然の観察法・接し方を学び、身近な自然を再認識してもらうような形をとっている。事後、父兄から「自然教室から帰った日の食事時に、子が目をかがやかして今日の出来事を話した」といった内容の手紙がよく来る。そして、今後は家族で近くの山に出かけてみたいという。これに対し、私は喜んでよいのか、悲しいのか複雑である。東京西部のきれいだった川や雑木林に囲まれて育った私には、今日の子供たちの多くが、初めて自然らしきものに接する機会を博物館等で行なう会のようなもので持つということは、おかしきも思える。

ところで、自然教室にはまだたくさん問題がある。子供自身でなく親が申し込む、参加はめぐまれた家庭の子が多い、申し込んだ者全員を受け付けることが出来ない……。さらには、上記のような内容でやってよいのか、学校教育と博物館教育との関係は……。博物館が行なう野外活動、自然教育についてはまだ考えていかなければならないことがたくさんありすぎる。多くの方のご意見をうかがいたい。

### 博物館職員講習を受講して

川口市立児童文化センター 永山 忠夫

5月末から35日間、学芸員の資格取得に必要な科目の講義を受けたが、資格取得を別にしても博物館職員としての基礎的教養向上のために有意義だったように思う。

科目のうち、博物館学は今後の博物館のあり方についての方向を示し、日常実務に追われている我々にとって大変役に立つのではないだろうか。自然科学史の講義も興味深く、自然史系職員として学ぶ点が多かった。

その他いずれの講義からも多くの刺激を受けたが、今後のために希望をのべるなら、教育原理および方法論についての講座を充実させる必要があるのではないかとと思う。教育について根本から見なおされている現代におい

て、それに対応できる教養を得ることは博物館の発展のためにも重要なことである。

いづれにしても、今回の講習に参加することができて大変ありがたく感謝している。

ところで本講習のあり方についてであるが、100名募集のところ、参加者はわずか27名であった。しかもその半数近くが人文系職員である。せっかく自然史系学芸員の養成を目指しながら、これでは目的を果たし得ないであろう。

元来、博物館には自然史系職員は少ない。特に研究的な活動をしている者は少ないのだから、博物館だけから

自然史系職員を募集しても無理である。もっと類似施設にまで広げて募集したらどうだろうか。青少年科学センターなどの方が自然史系職員は多く集っている。

参加者が少ないから来年の講習はどうなるかわからない、などの声を聞いたことがあるが、本講習の内容充実・運営方法の改善などをはかって、発展的に継続することを望みたい。

#### 科学技術館 栗本信子

35日間の講習も、7月4日をもって終了、翌日から東京は真夏の暑さに入り、宿題であったレポートを四苦八苦の態で書き上げたのも、今ではなつかしい。

日頃、博物館教育活動の一担に携わっているが、井の中の蛙、時折送られてくる協会や各館のニュースや出版物を通してのみ、博物館の様子をとらえることしか出来ませんでした。毎日の仕事が、博物館という立場に基づいていながら“博物館”を知らなすぎる。職場には、それに答えてくれる時間も、場も、雰囲気もなかなか見つけにくい現状です。自信をもって仕事をしたいという気持から、この講習に参加出来る機会を得ました。

博物館学を中心に、教育原理、社会教育概論、視聴覚

教育それに自然科学史、生物学とそれぞれ盛り沢山の内容に、もう少し時間があつたらと思わずにはいられない講義が多かったようです。博物館活動は、地道な研究活動であり、社会的責任と役割りの重要性はますます大きくなるであろうという一方、現実の我国の博物館の姿、あるいは学芸員のあり方など、あまりにも問題が累積されているのに改ためて考えさせられました。いづれの講義も、今後の私達に刺激と課題を残してくれました。

又、東京を離れての2泊3日の御殿場と箱根の現地研修、戦車の車輪のあとも生々しい富士山麓二合目での資料収集、清宏園内の溶岩墜道御胎内を全員くぐりぬけて泥にまみれての調査研究や、それに実習として、夜遅くまでかかってやっと自作自演の視聴覚教材を作り上げた事など、予期しなかった体験だけに、楽しい思い出として蘇ってきます。この講習会が、ただ単に資格修得の場でなく、この期間中、全国各地のいろんな博物館から参加された方々と、広く、親しく、卒直に語りあえたことはもう一つの生きた博物館学を学びえたようで、より意義深いものであったと思います。今後とも、このような機会に一人でも多くの人が参加できるよう、そして、この講習がより充実し、より発展するよう望む次第です。

## 会 員 館 園 の 紹 介

### 人 と 物 と 博 物 館

#### —山形県立博物館—

山形市のほぼ中央、かつて最上義光氏の居城であった山形城跡(霞ヶ城)の一角、静かなただずまいのなかに山形県立博物館がある。

本館は、山形県の明治百年記念事業の一環として建設されたもので、昭和45年11月に竣工、翌年4月1日に開館した動物・地学・植物・考古・民俗の5部門からなる、県内唯一の総合博物館ある。

歴史の新しい博物館であるが、本館が他に誇りうることは、新設の地方博物館のなかにあって、特筆すべき数多くの実物資料と国内はもちろんのこと、外国まで広く知られわたっているコレクションを収蔵していることである。

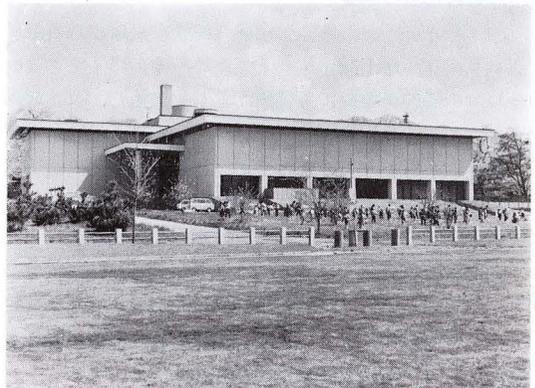
加えて、地方色むきだしの博物館活動が活発に展開され、県民の学術・文化の向上に、大きな役割を果していることである。

#### 実物資料の収集

開館3年目という短期間で、豊かな実物資料を収蔵できたのは、開設準備職員の精力的な収集活動によるものであるが、山形県総合学術調査会のご努力とご協力におおところが大きいのである。

本会は、昭和34年7月に発足して以来、本県の産業開発の基礎的資料と科学教育振興の資料にする目的で、本県の自然環境の総合学術を実施してきており、今、なお精力的に活動を続けている。このように継続的かつ長期的に、しかも広範囲にわたって実施されている例は、全国的にみても極めて稀れなことである。

もちろん、この間に収集された数多くの貴重な学術的資料が、本館設立の動機となり、それらが収蔵されるに及んで、実物資料の豊かな博物館の地位を確保できたのである。



山形県立博物館

### コレクションの収蔵

今日の社会状況のなかでは、到底収集することが不可能である2つのコレクションを収蔵している。

その1つは、内外の鳥類資料が網羅されている石沢コレクションである。昭和41年7月、43年12月の2回にわたって、山形県が本県出身の鳥類研究者・石沢慈鳥（本名健夫）氏から譲り受けた総6,270点の資料である。

この貴重な資料は、石沢氏の熱烈なる郷土愛と、本県当局の文化遺産に対する理解とが相俟ったことが収蔵できた大きな要因である。

その2つは、池田成功氏の洋蘭関係書のコレクション約7,000点である。この資料は内外の洋蘭関係書が悉く収集されているもので、洋蘭研究家の一見必読に値する貴重な文献である。

### 人づくり

長期的な展望に立った博物館運営には、まず、博物館職員の人づくりから始めなければならないだろう。特に「閉ざれた社会」の代名詞に、今なお引用されている博物館にとっては、避けて通り過ぎることができない大切な課題である。

本館には、専門分野を生かしながらも、博物館人としての資質を、実務を通して向上させることを目的とした内部組織運営機構がある。

その組織は、全職員がなんらかの形で、博物館の運営に直接参加することのできる機構になっており、環境整備、巡視、案内、救急、企画、渉外、広報、普及、資料の9つの係から構成されている。

この組織機構の特色は、個別的な職務と集団的な職務内容とを機能的に分担し、その両者が相互に関連しあって、博物館活動が展開されることである。

本館では、職務内容の個別化と集団化の関連を求めて試行錯誤を繰り返しながら、ようやく、「人づくり」の緒についたばかりである。

設立条件の恵まれた本館は、暗中模索しながらも、名実共に地方博物館のリーダーとして、また本県の学術・文化水準のパロメーターとして、さらには、博物館本来の「開かれた市民の大学」としての地位を確立すべく、地味な博物館活動を積み上げている。

(山形県立博物館学芸員 吉野智雄)

## 木の葉化石園

- 名称 有限会社木の葉化石園  
 所在地 栃木県塩谷郡塩原町中塩原 472  
 創業 大正元年  
 展示品目 内外各種化石 400点、鉱石類 100点、其の他動植物等の剥製品70点。  
 施設 展示場 140平方メートル、売店休憩所 260平方メートル、駐車場 1,300平方メートル、庭園等 1,200平方メートル、化石産出地 1,500平方メートル。  
 入園料 大人 40円 児童 20円  
 参観者数 年間約15万人

### 当園産化石の概要

地上20メートル内外の小丘陵（洪積世）は玻璃質凝灰岩より成り、地下数10メートルより丘陵の頂上まで3cm—15cmの層理が幾重にも規則ただしく累積し、高さ約20メートルの丘陵を造成しています。化石はそのいずれの葉理面にもたくさん埋蔵されています。この化石植物については、先年逝去なされた遠道誠道博士が次のように発表されています。化石植物の種類は160種類でいずれも当地方に現棲しているものである。絶滅種は数種類である——と。また、植物化石と同所に昆虫及び淡水魚がしばしば発見されます。昆虫の種類は数10種類と推定しますが、目下藤山家徳先生が研究なされています。

先年蛙の化石が3回ほど発見され、それについて鹿間



入口付近からみた木の葉化石園全景

時夫先生は「塩原蛙」として発表なされました。以上木の葉化石園産の化石の概要です。

### 新刊のお知らせ

I COM（国際博物館会議）日本委員会から「博物館組織—その実際的アドバイス」の改訂版と「博物館列品管理の方法」の再版が発行された。定価は各2,000円。お申し込み、お問合せは日本博物館協会内I COM委員会（電話03—669—2221）まで。